

令和6年能登半島地震

日本介護支援専門員協会ケアマネボランティア 活動報告 NO2

ケアプランセンター千代田 林隆夫

活動期間 令和6年3月26日(火)～3月28日(木)

活動場所 石川県輪島市

6年3月25日(月)

12:21 静岡駅発(京都経由、サンダーバード、北陸新幹線)

16:36 金沢駅着

18:15 現地対策本部着(宿泊場所:金沢市神野町東の賃貸アパート)

6年3月26日(火)

8:00 他県からのケアマネボランティアの方2人(福井県の男性、茨木県の女性)と合流、現地対策本部を出発。お二人とも1～2月にケアマネボランティア及びDWATに参加され、いしかわ総合スポーツや石川県庁でマッチングの支援経験あり。

10:30 輪島市に到着。輪島市役所2階のホールに設置された支援団体のブースにて、前回2月に訪問した時に避難所を案内していただいた細川さん(特養あての木園施設ケアマネ)と合流、活動について説明を受ける。風雨が強いので、午後の訪問調査は中止となる。

12:00 昼食後、現地活動拠点のトレーラーハウスに移動。

トレーラーハウスは輪島市役所から車で5分ほどのところにあるホームセンターの駐車場に置かれている。5台用意され、そのうちの1台にはデスクがあり事務作業や食事ができるようになっている。

他のトレーラーハウスの内部は2段ベッドが3台設置され、電子レンジ、ポット、冷蔵庫、エアコンが用意されている。この地区は断水状態のため仮設トイレを使用。



12:30 記入された調査票をタブレットで入力作業を行う。

15:30 活動終了

16:00 輪島市内の入浴施設に向かう

民間の入浴施設で有料(490円)。飲食ができるスペースもありゆったりしているがシャワーが使用できなかった。



18 : 30 夕食 (鳥鍋—ボランティア支援団体の方が準備)

6年3月27日(水)

7 : 30 朝食

8 : 30 トレーラーハウス出発。

8 : 45 輪島市役所到着

9 : 00 ミーティング 相談支援専門員の方 10名ほど+ケアマネボランティア 3名が参加

9 : 30 調査活動開始

相談支援専門員の方とチームを組み、2～3名の班に分かれ調査活動行う

11 : 30 午前中活動終了

12 : 00 昼食 (弁当配布)

13 : 00 調査活動再開

15 : 00 午後の調査活動終了

15 : 30 輪島市役所の活動拠点を撤収

16 : 00 輪島市内の入浴施設に向かう

避難所になっている小学校校庭に作られた自衛隊が設営している入浴施設。大きなテントの中に4m四方ほどのビニール製の浴槽が二つ設置され、周囲に蛇口とシャワーが使える洗い場が10か所ほど設置されている。隣に待機用(順番を待つ)のテントも設置されている。無料。



18 : 30

夕食

6年3月28日(木)

7 : 30 朝食

8 : 45 トレーラーハウス前でミーティング。相談支援専門員 10名ほど+ケアマネボランティア 6名+看護大学学生ボランティア 4名が参加



訪問調査開始

9 : 00 支援相談員、看護大学学生、地元のケアマネさんとチームを組み2～3名の班に分かれ調査活動行う

調査終了

10:30 ミーティング

11:00 今回の訪問調査は本日でいったん終了。体制を整えて来月から再開予定と説明がある。このため2台のレンタカーを石川県庁に戻すよう依頼がある。
金沢に向けて出発

12:00



途中、能登町の特養こすもすに立ち寄り、石川県介護支援専門員協会理事の水上さんを訪ねる。

13:00



16:30 石川県庁到着。活動事務局に車のキーを届け活動終了。

<活動の感想>

今回の活動は「石川県被災高齢者等把握事業」という参加目的が明確で活動期間も短く、また前回の経験もあったため、自身としては負担感が少なく活動ができたと感じている。

石川県の高齢者等把握事業は「誰も取り残さない被災者サポートプロジェクト」として、被災者の孤立防止や被災生活により状態の悪化が懸念される在宅避難されている方に対して、戸別訪問による早期の状態把握・必要な支援の提供をおこなうことを目的として日本介護支援専門員協会、日本相談支援専門員協会、及び全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）に事業を委託している。具体的にはJVOADが調整役となり関係機関と連絡し物資調達等を行い、そこに日本介護支援専門員協会と日本相談支援専門員協会の各職能団体で募集したボランティアが、日程を調整しながら参加し活動していたと思われる。

活動場所は、当初能登町と言われていたが、能登町での調査は終了したとのことで1週間ほど前に輪島市に変更になった。輪島市では以前水道が不通の地区が多くあり、様々な支援団体が滞在できず活動時間が限られていたため、復興が遅れていると言われている。今回は現地にトレーラーハウスが用意され、そこを拠点に活動ができたため、長距離の移動の必要性がなく効果的な活動が可能となった。ちなみに相談支援専門員協会の方は七尾市等から輪島に通って活動されていた。（移動時間は45分程度か）

トレーラーハウスには空調があり冷蔵庫や電子レンジも設置されていて特段の不便はない。トイレは仮設トイレを使用し、トレーラーハウスがおかれている大型のホームセンターの職員さんが清掃をしてくれていた。断水の地域ではトイレに困るので、仮設トイレは不特定多数の方が使用することになり、かなり汚れている場合もある。照明がないので夜間は電気ランタンが用意されていた。

食事と水は支援団体で準備されており、初日は鍋料理を振舞っていただいた。輪島市内のスーパーやコンビニなども営業していたので購入できたが、どこも営業時間が短くコンビニも基本日中しか開店していなかった。入浴は民間の入浴施設と避難所に設営されている自衛隊のお風呂を利用することができた。まだ水道設備が不十分なため、シャワーが使えない場合もあった。移動はどちらも車で 10 分ほどかかる。

調査活動では二日目に輪島市の中心部から車で 15 分程度の郊外で、畑が多く農家が多い点在している地区を担当。3 人で 10 数件訪問を行い、実際に調査ができたのは 1/3 程度だった。全壊してしまっている家も珍しくない。その中で 70 代後半くらいのご夫婦世帯を調査。ご主人の足が悪く自衛隊のお風呂を利用するそうだが、浴槽が深いので入るのが大変とお話だった。介護認定はしていないが申請すれば介護 1 程度と思われ、調査票の特記事項に記入しミーティングで申し送りしている。三日目には活動拠点から近い地区で、住宅やアパートなど 30 件ほどを二人で訪問したが全壊している家が多く、また留守宅も多いため、調査できた件数は 3~4 件であった。アパートにお住まいの方とインターホンでやり取りしたが、調査自体に不信感がある様子で拒否されることもあった。また、輪島塗のお仕事をされている立派なお宅では、「朝市通りのお店は全焼し支援金等の対象になったが、半壊した自宅と両方は出ないと説明された。両方とも税金を払っているのにおかしい」と納得できない様子で、これについても特記事項に記入している。

調査内容は約 30 項目。世帯主、世帯人数、被災状況、罹災証明書の状況、今後の生活場所の希望（自宅、仮設、その他）、食事がとれているか、移動手段は困っていないか、かかりつけ医があるか、介護や障害の認定を持っているかなどで、順調に進めば 10~15 分程度で聞き取れる内容となっている。この内容をタブレット端末を使い入力しデータ化している。訪問調査は午後 3 時までに切り上げるようになっていたが、その後の入力作業は JVOAD の方や地元のケアマネさんが夕方まで行っていた。

今回、現地のケアマネさんがボランティア活動に参加されていて、実際の被災体験を聞くことができた。

A さん：女性 輪島市内の居宅介護支援事業所に勤務。デイ、ヘルパー、訪看、小規模も併設。職員は全員被災したが、建物は無事だったのですぐに事業を再開。2~3 週間は安否確認を行った。ドコモの携帯電話はつながったが au はだめだった。自宅は全焼してしまい、避難所生活。最初の 3 日間は水や食料がほとんどなかった。今は仮設住宅に入居している。

B さん：女性 輪島市内の居宅介護支援事業所勤務（ケアマネ 2 人）。震度 7 の揺れは本当にすさまじく、まったく何も持ち出すことができなかった。輪島中学の避難所で生活。避難所内での支援に参加し要介護者のおむつ交換など援助した。自衛隊の支援はとても助かったが、おむつ交換はしてくれなかった（できる人がいない）。最大 700 人が避難した避難所のトイレは想像を絶していた。1/3~1/5 の間が一番大変だった。一日にコップ半分の水しかなかった。1/5 まで携帯はつながらなかった。事務所は無事だった。1/20 まで利用者の安否確認を行った。金沢などの避難先から施設入所を希望する方もあったが、こちらでは情報がないので、家族に探してもらったり、地域包括に行き相談した。震災前は 35 人の利用者がいたが、現在は 3 人程度。2 月にデイサービスが再開したところもあるが、ヘルパー事業所は 1 か所しか稼働していない。ヘルパー事業者はもともと 3 か所しかなく、社協さんは今後 1 年間ヘルパー事業を再開しない方針ときいている。今後高齢者が地域で生活できるかどうかは、病院の機能が戻るかどうかにかかっていると思う。

地元ケアマネさんから伺った被災体験はとても重い内容で、聞いてしまってよかったのかと後から思い、謝意を伝えた。自身が大きな被災をしながらケアマネジャーとして懸命に活動されている姿に、とても心を動かされた。発災直後は何もできない状態だったことが推測され、事業所だけでなく家庭や地域の災害対策をもう一度考えてみるべきと感じている。

また活動の帰路で、能登町の特養こすもすを突然訪ね、旧知の水上さんにお会いできたのは幸運だった。水上さんは「地域の施設としてしっかり対応しなければならないと思っている。やりたいことと、やらなければならないことは違う。自分は、施設内で今何をやらなければならないかを示す存在だと自覚し活動している。」と力強く仰っていて、力のこもった握手もしていただき、私の方が勇気づけられる思いだった。支援物資やお土産など全く持たずに急にお尋ねしてしまい、ご無礼を反省している。

